

北大阪線の風景

阪神電鉄北大阪線 --- 野田阪神と天六を結んでいた路面電車です。大正年間に創業されたそうですが、1975年に廃止されました。私が生まれ育ったのは、この北大阪線で野田阪神から二駅目、「上海老江」という停留所の付近です。戦前からの長屋の一角で、我が家の先達（私の祖父と祖母）が住み始めたのは大正の頃からと聞いています。天皇陛下の写真があって、神棚があって、大陸で戦死したおじさんの遺影があって……。朝から晩までせっせと働く両親の背中を見ながら、結局、私は人生のうち30年近くをあの家で過ごしました。あの家で祖母を見送り、あの家から妹たちが嫁いで行った後、私はお隣の此花区に分不相応なマンションを購入して両親を呼び寄せました。この時をもって、我が家は福島区海老江を完全に引き払うこととなったわけですが、あれから15年を経た今でも、私の夢に出てくるのは、あの海老江の「狭いながらも楽しい我が家（愛の灯影のさすところ）」です。

というわけで、この記事では、北大阪線沿線の庶民の生活にまつわる四方山話を調べてみようと思いましたが、私がこの世に存在する以前に、我が家の先達たちが過ごした海老江の町と北大阪線の風景です。

まず、北大阪線の生い立ちあたりのこと。『大阪春秋』第80号に、非常に興味深い、貴重な調査報告（中島陽二「社会運動の中心地--戦前の野田阪神」）を見つけました。明治末期から大正、昭和初期にかけて、野田阪神は、勃興する大阪経済の「ハブ」の機能を果たしていました。福島・野田近辺はもとより、此花区や港区・大正区にも巨大工場地が出現し、「毎日、北から東から西からの労働者を野田阪神を経由して工場に送り込む」ための交通機関のひとつとして、大正3年8月に、北大阪線は開通したそうです。



また、この調査は、戦前の野田阪神が、大阪の社会運動の中心地であったことを紹介しています。野田阪神を中心に大開・吉野・海老江近辺には、労働組合や農民組合などの本部が集中していて、さらに「大阪労働学校」が存在したそうです。労働学校とは、文字通り、労働者に法律や経済の高度な専門知識を授ける学校だったようで、当時の入学案内パンフレットがインターネット上で自由に閲覧できます（この文章の末尾に URL を記載しました）。16年間のあいだに延べ2000人が入学し、うち1300人ほどが修了したそうです。学費は、1学期（3ヶ月）で、たったの3円

でした。教員の初任給が50円、エ

リートサラリーマンの月給が100円だった時代ですが、もちろん国庫補助やスポンサー企業などあるはずもなく、理想に燃える創設者や講師陣がまったくの手弁当で学校を運営していたことがうかがえます。その理想とは「有産階級の独占から教育を解放すべき事」、つまり、生まれや育ちによって大学入学が制限されていた時代に、すべての人に高等教育を授ける「ほんとうの学問の場」をめざしたということでしょう。じっさい、講師陣は豪華メンバーで、たとえば森戸事件で東大を追われた森戸辰男や大内兵衛をはじめ、当代超一流の学者ぞろいです。東京裁判で東条英機の弁護をした清瀬一郎も講師の一人に名を連ねていたようです。



大阪労働学校は昭和12年に閉校されます。昭和12年といえば日中戦争がはじまった年で、7月7日盧溝橋、7月29日通州、そして12月13日南京城陥落と、キナクさい事件が続きます。しかし、この年には、職業野球で、大阪タイガースが東京巨人軍を破り、連覇を果たしています。当時の巨人軍のエースは沢村栄治、対するタイガースの四番は景浦将、ちなみに、この前年に作られた「大阪タイガースの歌」（通称「六甲風」）の歌詞のリフレイン（「オウ、オウ、オウ、オウ」）は直後に続く「大阪タイガース」の「大」の音の押韻だったとか。



この頃の海老江の様子を描いた小説（榎谷優『北大阪線』）を見つけました。次は、この小説の結びの部分からの引用です。北大阪線のなつかしい光景が目浮かぶ、とても美しい描写だと思えます。

「12月8日、天六行きの始発が停留所に止まる。ドアの開閉、ステップの音、ダイナモが、ういいういーん、としり上がりに唸りをあげる。車輪がゴトリと動き、だんだん速度をあげて遠ざかって行く。東の空が樺色になり、すすけた家々の輪郭が現れ、屋根屋根の上に東の間澄んだ寒気がながれる。」



この12月8日は実は真珠湾攻撃の日で、小説ではこのあとに、対米英開戦の大本営発表が軍艦マーチとともにラジオから流れるシーンが続きます。しかし、この小説全体の主題は、厳しさを増す国家統制のなかで、したたかに明るく生きようとする庶民の姿と言えるようにも思います。小説には、北大阪線沿線の「長屋」の住人が登場します。なかには、沖縄出身の瑞慶覧さん・中城さんや、朝鮮半島出身の季村さんなども。不穏な世情を反映してサスペンス・ドラマのような疑心暗鬼もとびかいますが、純朴な大酒飲み、堅物の技術屋、一張羅の背広を質屋の蔵に預ける伊達男など、それぞれが、気のいい、まさに長屋の住人です。



◇ 次の文献の内容の一部を文中に引用させていただきました。

「社会運動の中心地 -- 戦前の野田阪神」中島陽二、『大阪春秋』第80号、1995年

『北大阪線』榎谷優、編集工房ノア、2002年

『1928年大阪労働学校案内』

（大阪府立大学「長尾文庫」所蔵、http://157.16.123.2/~swlib/nagao_c4/c0331.html）

◇ 北大阪線のモノクロ写真は、「懐かしの蒸気機関車写真館」（<http://kubojun.site.ne.jp>、久保順・館長）のご好意により転載しています。野田阪神駅前の北大阪線カラー写真は、http://www.2s.biglobe.ne.jp/~yama01/Hanshin_Kokudou_c2.htmより転載しています。

（匿名記者・あ）